

大空にアドバルーンを揚げて



関根志郎 さん
(横山町一丁目・60歳)

「アドバルーン」ある年代以上の方々には、懐かしい響きを持った言葉だと思います。デパートの大売出しや新しい店の開店などには、決まって大空に浮かぶアドバルーンの姿がありました。アドバルーンには気分を高揚させる不思議な魅力があるようです。今回は、「関東アドバルーン社」代表の関根志郎さんにアドバルーンについて話を伺いました。

「兄の会社で修行して20年前に開業しました。アドバルーンを扱う会社は、茨城県内には3社しかありません。特殊な業種といえるでしょう。アドバルーンはビニールでできています。なかに充てんするガスは、以前は水素でしたが、安全性を考えて現在はヘリウムを使っています。県内のスーパーマーケット、ホームセンター等数社と専属契約を結んでいますがホームページを開いてからは、秋田市や仙台市など遠方からの依頼も来るよう

ぶんがくかん発
Vol.80

古河文学館のこと その2 粕谷栄市（詩人）

県の建築文化最優秀賞のその建物（文学館）には、古河出身あるいは、ゆかりのある、永井路子、小林久三、佐江衆一氏らの小説家、逸見猶吉、粒来哲蔵氏、粕谷栄市らの詩人、沖ななも氏らの歌人、さらに先人、若杉鳥子、和田芳恵らの著作が、多くの資料や写真とともに、新鮮なレイ・アウトで常設されている。

また永井路子の展示室とともに、昭和初期、鷹見久太郎の出した『コドモノクニ』の原画などの資料を中心とした児童文学の展示室もある。

談話室では、幻の名器と呼ばれるE.Mジーンの手作りの蓄音器で、蒐集のSPの名盤を楽しむこともできる。

三千本の桃林や蓮沼のある、今年、ユネスコから、メリナ・メルクーリ国際賞を受賞した、古河公方ゆかりの「古河総合公園」から、ここを訪ねるのは気分のよいものである。

運が良ければ、その時々によって『近代説話』展、『和田芳恵』展、『子供の王国』絵本黄金時代展、『石垣りん』詩の朗読会などの企画や催しに出会えるだろう。

文学は、読むこと、書くことによって成立するものである。文学館の使命は、未来に、その創造

のエネルギーを伝えるものとなることだろう。展示を楽しませる以上に、地域の文化を、豊饒なものとするための拠点となることなのである。蹉跌を恐れない、発火の試みこそ大事なことだと思う。

それは、おそらく、この文学館のために、無償の多大な影の後援をされた、永井路子さんの願われたことである。

館内は、残念ながら、アルコール禁制なのであるが、階上に併設のレストランもある。ジャンルや世代を超えて、さまざまな意図を生かす、楽しい集まりが、数多く開かれることを、私は希望して止まない。

この文章は日本近代文学館の平成16年1月の館報に掲載されたものを、館及び粕谷氏のご好意に

より転載させていただいたものです。前半部分は3月号に掲載されています。

著者の近況：昨年、「続・粕谷栄市詩集」が思潮社から出版されました。今年、雑誌「詩学5月号」に作品特集が掲載されるほか、詩集「鄙歌」・詩集「転落」の2冊が出版される予定です。



著者近影